

お茶うけ 第96話

明治の改暦 天保暦(太陰太陽暦)より太陽暦へ (その1)

日本の歴史を読みますと、江戸時代の末期から、諸外国との交流が頻繁になっていくことが分かります。その中の大きな出来事の一つは、1853年7月8日(嘉永6年6月3日)に、アメリカ東インド艦隊司令長官・海軍代将M. C. ペリー(Matthew Calbraith Perry)の率いる軍艦4隻が浦賀沖に姿を現したことです。いわゆる「黒船来航」で、長い鎖国を続けてきた日本人びとを大いに驚かせました。その頃の歴史的な出来事の日付は、日本の暦と、欧米諸国の太陽暦(西暦)の二つの暦日が並べて書いてありますが、それは当時の日本の暦が天保暦(太陰太陽暦、いわゆる旧暦)であったためです。



明治時代になって、政府は日本の暦を、天保暦(太陰太陽暦、旧暦)から、欧米諸国並の太陽暦(新暦)に改暦することを決めましたが、改暦をする理由の一つに、外交文書などに天保暦と太陽暦の二つの暦日を併記するという煩雑さを避けることがあったと言われます。政府は、明治5年(1872年)11月9日に太陽暦への改暦の詔書を発行して、旧暦の12月2日の次ぎの日を、新暦の明治6年(1873年)1月1日とすると布告しました。この改暦にまつわるエピソードは、次回の(その2)で紹介することとし、今回は旧暦と新暦について説明します。

最近では日常生活に新暦(太陽暦)がすっかり定着して、正月と言えば新暦の1月1日のことで、旧正月(旧暦の正月)を祝う人は少なくなりました。夏の盂蘭盆会(うらぼんえ)は、陰暦の7月15日に寺で営まれる法要のことです。今は盆の行事を、一般に新暦の7月15日や1ヵ月後の8月15日に行いますが、これは「7月15日」の日付を新暦に当てはめ、その1ヵ月遅れの8月15日が旧暦の7月15日に近いので、お盆の日としていると思われま

す。新暦と旧暦の二つの暦の日付の対応を、最近4年間の正月、立春、旧正月(旧暦の正月、1月1日)、春分、盂蘭盆会(旧暦の盆、7月15日)について表にまとめました。

年	正月	立春	旧暦正月	春分	旧暦の盆	備考
2000(H12年)	1月1日	2月4日	2月5日	3月20日	8月14日	新暦:閏年
2001(H13年)	1月1日	2月4日	1月24日	3月20日	9月2日	旧暦:閏4月あり
2002(H14年)	1月1日	2月4日	2月12日	3月21日	8月23日	
2003(H15年)	1月1日	2月4日	2月1日	3月21日	8月12日	

(注:Hは平成。平成13年は、旧暦では、4月と閏4月(29日)があり、1年13ヵ月であった)

この表から、太陰暦がベースの旧暦の正月と盂蘭盆会の日が、太陽暦による新暦の日付では、年によってかなり移動していることが分かります。それに対して、太陽の運行を基にした二十四節気で定められている立春や春分の日付は毎年ほぼ同じです。

太陰暦、太陰太陽暦(天保暦、旧暦)、太陽暦(西暦、新暦)と、閏月、閏年、および二十四節気については、下記の『暦の説明』を参照願います。

現在は、ほとんどの人が太陽暦の正月を祝い、旧暦の正月を祝う人びとは少数ですが、鎖国時代には天保暦の正月の他に、太陽暦による「オランダ(阿蘭陀)正月」を祝う少数の人びとがいました。当時、長崎の出島にいたオランダの人たちです。彼らは故国の生活様式と習慣に合わせて、新年を太陽暦の1月1日に祝いましたので、長崎の人びとはこの日を「オランダ正月」と呼びました。後に、日本の蘭学者たちがオランダ人の風習を真似て、太陽暦の1月1日に当たる日に開いた祝宴も「オランダ正月」と呼ばれました。「オランダ正月」の催しの中で有名なのが、蘭学者のリーダ格であった大槻玄沢(げんたく)が、自らの塾「芝蘭堂」で催した祝宴「新元会」です。当日の様子を描いた「芝蘭堂新元会図」が残っています。

「新元会」は、西暦1795年1月1日にあたる寛政6年閏11月11日に催されましたが、図には「寛政六年甲寅閏十一月十一日即西洋一千七百九十四年一月一日」と書かれています。図の作者が、西暦年の換算を間違えたようで、1795年が1794年と書いてあります。旧暦の日付の記録は、このように、年号の「寛政」、干支(えと)の「甲寅」や、閏十一月などと列記していました。

「寛政」などの年号、「甲寅」などの干支(えと)と、干支の要素である十干(じっかん)と十二支(じゅうにし)などについて、下記の『暦の説明』で説明します。

以上

『暦の説明』

暦(こよみ)は、日読みの意味である。

暦は、1年間の月・週・日、日の出・日の入り・月の満ち欠け・行事などを日を追って記したものである。太陰暦、太陰太陽暦、太陽暦などがある。

暦を作るのに暦法を使う。暦法は、天体の運行を観測し、それに基づいて暦を作る方法である。

私たちの日常生活に最も関係が深い天体は太陽と月である。大まかに言えば、太陽暦は地球が太陽の廻りを1廻りする時間を基準にして、それを1年と定めた暦である。また、太陰暦は月の満ち欠けの1周期を基準にして、それを1月(month)と定めた暦である。太陰暦には、その暦日と地球の公転による四季との間の乖離が年毎に大きくなる性質がある。太陰太陽暦は、太陰暦をベースにしているが、暦日と季節とが乖離しないように、閏月を加えて補正する仕組みを持つものである。

[注1 太陰暦]

月(moon)の満ち欠けの1周期(朔望月と呼ぶ、約29.53日)を暦の1月(month)と定め、その朔望月の1月(month)を12カ月重ねて、1年とする暦である。「イスラム暦」は、朔望月の日数を交互に29日、30日とし、12カ月で1年と定めたので、1年は354日になり、太陽が黄道を廻る1年(約365日)に比べて約11日短い。「イスラム暦」のような暦を純太陰暦と呼ぶ。純太陰暦では、年の始めが毎年11日づつ季節より進んで、33年経つと1カ年分進んでしまう。また、「イスラム暦」では、月の朔望と暦の差が1年で0.36日になるので、この端数を補正するために、30暦年の間に11回の閏年(1年が355日)を置いている。[但し、 $0.53日 \times 12 - 6日 = 0.36日$]
[黄道(こうどう):地球から見た場合の太陽の軌道を表す大きな円]

[注2 太陰太陽暦(天保暦、明治の改暦後は旧暦と呼ばれた)]

太陰太陽暦は、その基は太陰暦と同じく、月(moon)の満ち欠けの1周期(朔望月、約29.53日)を暦の1月(month)と定め、その朔望月の1月を12カ月重ねて1年とするので、1年は354日である。しかし、1年354日では、太陽が黄道を廻る1年(約365日)に比べて約11日短く、年毎に暦日と季節との乖離が大きくなるので、おおよそ3年に1回(実際は19年に7回)の割合で閏月を加え、1年を13カ月として、季節との乖離を解消させる仕組みを備えた暦である。1月(month)の日数は、29日(小の月)と30日(大の月)の何れかであるが、必ずしも大小交互ではなく、定朔法による計算に従って、大の月が4カ月も続いたり、小の月が3カ月も続くことがあった。

日本の暦は、古くから太陰太陽暦であった。1844年から施行された天保暦は、太陰太陽暦として完成度の高いものといわれる。また、閏月の例としては、前記のように、平成13年に4月と閏4月があり、寛政6年に11月と閏11月があった。これらの年は、1年が13カ月であった。
[定朔(ていさく):太陰暦において、月の真の運行を計算して、新月の日(朔という)の時刻を決めること。朔望月の平均から決めるのを、「平朔」という]

[注3 太陽暦(西暦、明治の改暦後は新暦と呼んだ)]

太陽暦は、太陽が黄道を一回りする時間(約365.2422日)を1年とする暦である。
1年を365日とし、端数の0.2422日を、4年に1度の閏年(1年を366日とする)を置いて調整する。

[注4 十干(じっかん)]

10日を1旬としたとき、この10日を順序づけるのに、甲・乙・丙・丁・戊(ぼ)・己(き)・庚(こう)・辛(しん)・壬(じん)・癸(き)の10字を用いた。日本では、木・火・土・金・水の五行と陰陽の二元とを組み合わせた10組に、十干を対応づけた。すなわち、甲は木の陽、乙は木の陰、丙は火の陽、丁は火の陰と、順に対応させたのである。陽と陰の読み方は、それぞれ陽を兄(え)、陰を弟(と)とした。従って、木の陽に対応する甲を(きのえ)、木の陰に対応する乙を(きのと)と呼び、以下同様に、火:丙(ひのえ)、丁(ひのと)、土:戊(つちのえ)、己(つちのと)、金:庚(かのえ)、辛(かのと)、水:壬(みずのえ)、癸(みずのと)と呼んだ。

[注5 陰陽五行説(いんようごぎょうせつ)]

古代中国の宇宙と人間を含む世界観。陰陽説は、陰と陽の二元の気の消長により宇宙の万物の生成を説明するものである。五行説は、宇宙の万物は木・火・土・金・水の五つの要素でできており、この五つの要素の盛衰消長によって、自然界、人間社会の諸現象が定まるといわれる。陰陽五行説は、陰陽説と五行説の二つの概念が総合されたものであり、天文現象と人事との相関関係を説く原理とされた。

[注6 十二支(じゅうにし)]

中国の暦法で、年を十二分して付けた十二の文字、子(し)、丑(ちゅう)、寅(いん)、卯(ぼう)、辰(しん)、巳(し)、午(ご)、未(び)、申(しん)、酉(ゆう)、戌(じゅう)、亥(がい)、の総称である。十二支は、1年の12カ月の月の名を示す記号に使用され、また時刻や方角にも用いられた。さらに、十二支と十干と組み合わせで作られた60の組が、日、月、年の順序を示すのに利用された。
十二支獣(じゅうにしじゅう)

中国の戦国時代の頃から、十二支にそれぞれ動物を当てるようになった。十二支獣は、これらの動物の総称で、子に鼠(ね)、丑に牛(うし)を当て、以下順に、虎(とら)、兔(う)、竜(たつ)、蛇(み)、馬(うま)、羊(ひつじ)、猿(さる)、鶏(とり)、犬(いぬ)、猪(い)を当てている。

[注7 十干十二支(じっかんじゅうにし)]

干支(かんし)、60干支、えと、ともいう。十干の甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸と、十二支の子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥、とを組み合わせると、下表のように60の組み合わせができる。

干支の60組は、日、月、年の順序を示すのに用いられた。

日本では、古くから年を数えるのに干支を用いてきた。

年号が定められた後も、年号と干支を併記した。本文の「寛政六年甲寅」は、その例である。干支を併記することで、例えば「寛政」の次ぎの「享和」のように4年ほどの短い期間で年号が改元されても、併記してある干支を数えれば、ものごとの経過年数を正しく把握できるので便利であった。

干支No.	干支No.	干支No.	干支No.	干支No.	干支No.
甲子	1 甲戌	11 甲申	21 甲午	31 甲辰	41 甲寅
乙丑	2 乙亥	12 乙酉	22 乙未	32 乙巳	42 乙卯
丙寅	3 丙子	13 丙戌	23 丙申	33 丙午	43 丙辰
丁卯	4 丁丑	14 丁亥	24 丁酉	34 丁未	44 丁巳
戊辰	5 戊寅	15 戊子	25 戊戌	35 戊申	45 戊午
己巳	6 己卯	16 己丑	26 己亥	36 己酉	46 己未
庚午	7 庚辰	17 庚寅	27 庚子	37 庚戌	47 庚申
辛未	8 辛巳	18 辛卯	28 辛丑	38 辛亥	48 辛酉
壬申	9 壬午	19 壬辰	29 壬寅	39 壬子	49 壬戌
癸酉	10 癸未	20 癸巳	30 癸卯	40 癸丑	50 癸亥

〔注8 紀年法、年号(元号)〕

紀年法は、歴史上に定めた時から年数を数える方法である。キリストの生誕を紀元とする西暦が最も一般的である。明治、大正、昭和、平成などの元号も紀年法の一つである。

日本の元号は、幸徳天皇の「大化」が最初である。年号は、天皇の即位の初めに改元されたが、それ以外にも瑞祥や異変の度に数多く改元された。ちなみに本文にある、「寛政」は1789～1801年であり、次ぎの「享和」は1801～1804年と短かった。

明治からは一世一元となった。

〔注9 二十四気(にじゅうしき)、二十四節気(にじゅうしせっき)〕

地球の季節は、太陽の黄道上の位置によって変わる。天保暦の時代、二十四節気は季節の変わり目を示す目安とされた。人々は農作業などをするのに、暦に付け加えられた節季を見て、季節はずれにならないようにした。

二十四節気は、太陽が移動する黄道を24等分して、その1つづつに季節を割り当てたものである。二十四節気は、立春、雨水、啓蟄、春分、清明、穀雨、立夏、小満、芒種、夏至、小暑、大暑、立秋、処暑、白露、秋分、寒露、霜降、立冬、小雪、大雪、冬至、小寒、大寒である。例えば、春分は黄径0°、冬至は黄径270°に当たる。

天保暦の暦日は、黄道上の太陽の位置とは一応無関係に決まるので、暦日と季節が乖離する。例えば、天保暦の3月21日が、春分の季節より10日から20日もずれることがあるので農作業に不都合が起きる。そこで、農家は種まきなど農作業をするのに、太陽暦的な要素を持つ二十四節気を目安にした。すなわち、人々は天保暦の暦日と、二十四節気の二本立てで生活していたのである。

〔黄経(こうけい): 春分点を基点にして、黄道に沿って東まわりに計った角度〕

〔注10 雑節(ざっせつ)〕

雑節は農業国であった日本の人びとの長い生活体験から生まれたもので、いろいろな仕事を行う目安として用いられた。

雑節は、節分、彼岸(春と秋)、社日(しゃにち、春は五穀の豊作を祈り、秋は収穫のお礼をする)、八十八夜、入梅、半夏生(はんげしょう)、土用などである。土用は年4回、春夏秋冬それぞれにあったが、現在は夏の土用だけが残っている。

(注)2のn乗理論:

うどんを練るときは、うどん粉を平たく延ばしては半分に折り重ねて押しつけ、粉に水分をまんべんなく附着させる。半分に折る動作を繰り返すと巾(べき)乘以層が増え、n回折り重ねると層の数は2のn乗になる。

参考資料:

『発想の建設 - 又兵衛が翔んだ』前田 又兵衛著 飛鳥新社刊

1998年6月7日発行

『強さのおはなし』森口 繁一著 (財)日本規格協会刊

1997年2月5日発行

この文書の著作権は株式会社富士通アドバンスソリューションズが保有します。許可なく複製、転用、販売などの二次利用することは禁じます。雑誌書籍、広告など出版物への掲載にあたっては、お手数ですが、事前にご連絡願います。